

## 第41回大会シンポジウム報告

した。そこで、新設校における教育課程の編成と個別の指導計画の作成という観点から報告した。前任校の教育課程は、国語や算数の教科のほかに、生活単元学習や作業学習など領域・教科を合わせた指導で編成している。また、個別の指導計画は、各指導の形態毎に、学期毎に個別目標を掲げている。ここでの経験から、特に個別の指導計画と授業づくりとの繋がりや教育評価の視点が重要であることを指摘した。そこで、新設校では、指導記録を個別の指導計画と統合する形で新しい通知表を考案していることを紹介した。

## 2) 高橋 玲氏：個別の教育的ニーズから派生した教育課程と個別の指導計画

高橋氏は、平成12年度から文部科学省研究開発学校として教育的ニーズに応える教育課程と授業の実践に取り組んできた。この研究では、個別の教育的ニーズを起点にした教育課程の編成について、「個別の教育的ニーズがそのまま個別目標となり、その個別目標に応じて教育内容を設定し、その内容を取り扱う授業実践を展開する」といった教育的ニーズに基づく学習指導の組み立て方を具体化してきた。これまでの法制等によって定められてきた教育課程の編成を見直し、個々の教育課程を編成することの重要性を紹介した。

## 3) 森 浩一氏：個別の指導計画の改善をいかにすべきか

森氏は、平成11年度から継続している「個別の指導計画」を紹介した。この特徴は、教育カルテと通知表が指導計画と関連づけられていることである。5年目を迎えた実践上の課題としては、①各授業や各単元との関連性の明確化、②評価時期の基準となる学期区分の検討、③児童生徒の特性や教育的ニーズに応じた教育課程編成の検討、④高等部段階での「個別の移行支援計画」との関連性の検討などが挙げられている。特に、一度システム化された個別の指導計画を改善することの難しさを指摘した。

## 3. 指定討論者の要旨

高橋幹則氏：新しい視点に基づく個別の指導計画の作成と実施への期待

高橋氏からは、書式タイプをよりよく活用していくための改善点は何か(跡部氏に)、独自の教育課程が公立校で生かされるポイントは何か(高橋氏に)、日々の授業活動の中でどのように生かしていくのか(森氏に)、の3点について質問を求めた。

跡部氏からは、A4判2枚程度の完結明瞭な書式と日々の指導記録を充実させ、それを書式と授業に生か

せるようにすることを示した。高橋氏は、現在の指導内容や指導の形態を再構造化を図ることにより実践できることを示した。森氏は、パソコンを活用して共有化を図っていること、個別目標や指導内容・方法についての査定システムを明確化していることを示した。

## 4. 全体討論の要旨

フロアからは、いくつかの質問が出されたが、紙面の都合上、以下の点にまとめた。

跡部氏に対しては、通知表の内容や評価についての質問が出され、学校としてこの部分ができることといったスタンスに立って保護者に説明していることを述べた。また、高橋氏に対しては、教室移動、授業の見通し、集団の力の育成等についての質問が出され、移動はスケジュール表に示されているので、それを見ながら活動していることや、朝の会や給食などで学級集団を構成していることを述べた。さらに、森氏に対しては、個別の指導計画の個別目標や評価の見直しについての質問が出され、表記として個別目標の保護者に渡すという視点に立ってわかりやすい表現に変えてきたことや、管理職や主事等のチェックシステムの強化を図っていることを述べた。

## 自主シンポジウム 37

## 行動問題のある発達障害児者のQOLの向上を目指した積極的行動支援(4)

— 効果的なプランニングに向けた  
アセスメントと介入決定の方法 —

企画者 藤原 義博(上越教育大学)  
平澤 紀子(西南女学院大学)

司会者 藤原 義博(上越教育大学)

話題提供者 小笠原 恵(東京学芸大学)

岡村 章司(横浜市立港南台ひの養護学校)

平澤 紀子(西南女学院大学)

## 1. 企画趣旨

行動問題のある発達障害児者のQOLの向上を目指す積極的行動支援(positive behavioral support)についてのこれまでの検討から、1)行動問題の生起要因に応じた機能的な介入(技術基準:technical sound)と、2)実施される文脈に適合した介入(文脈基準:

## 第41回大会シンポジウム報告

contextual sound) が重要とされたが、未だ2)の文脈基準を満たすためのアセスメントや介入決定の方法は確立していない。そこで、本シンポジウムでは、話題提供者から、支援環境に適合した介入決定のために、1) 機能的アセスメントの他にどのような情報を収集しているか、2) どのような考え方に基づいて、3) どのような手順で最終的な介入を決定しているか、4) その成果や課題は何かを事例を通して示してもらった。それを基に、日常場面の効果的なプランニングに向けて、① 行動問題の生起要因に関する情報収集、② 要因仮説の推定、③ 介入のプランニング、④ 環境や人々への適合性から整理し、文脈基準を満たすためのアセスメントと介入決定の方法について検討した。

## 2. 話題提供者の発表要旨

## 1) 小笠原恵：効果的なプランニングに向けたアセスメントと介入方法の決定

18歳の自閉性障害男性の通所施設における儀式的な行動(その場で回転する、手や足を繰り返し回す等)について、儀式的行動を短時間で終了し、他の活動への参加を促す支援を行った。アセスメントとして、儀式的行動について、生起しやすく他の活動に影響が出る場面と出ない場面、生起しない場面、持続時間、きっかけ、直後の対応を、記録と施設職員へのインタビューによって査定した。それを基に、対象者にとって嫌悪性が低く、実行者が簡易にかつ継続して実行できる効果的な介入を決定した。職員との協議により、儀式的行動のアセスメント情報から行動の機能仮説をたて、それに基づいて先行事象および結果事象の操作を含む介入を立案・実施し、実行経過から介入を評価した。その結果、儀式的行動が減少し、他の活動への参加が増加した。

## 2) 岡村章司：強度行動障害者の攻撃行動に対する低減方略

20歳の自閉症男性の小規模作業所における激しい攻撃行動について、作業所職員が活動参加を促し、攻撃行動とその兆候行動に対応した。アセスメントとして、① 対象者の行動問題の分析、② 実行者のライフスタイル、職務条件、対象者との適切なかかわり、③ 勤務体制、環境設定、利用者の様子、職員間の関係等を査定した。そこから、実行者が対象者の行動を制御しやすい活動を1つ選んで介入した。行動分析学の哲学・理論を職員に伝え、要因仮説を導出し支援計画を立案し、介入しやすい活動を選んで手続きを立案し、最初の介入で岡村が手続きを実行した。職員との協議

により、介入場面と手続きを決定し、介入前に職員と行動リハーサルを行い、職員の実行経過から計画を修正した。その結果、攻撃行動は減少したが、一貫した支援が実施されない場面がみられた。

## 3) 平澤紀子：福祉施設ショートステイ場面の他傷行動解決支援の事例から

26歳の自閉性障害の女性で、施設場面で他傷を示す。施設職員が、他傷を回避し、活動参加を目指す支援を行った。アセスメントとして、① 対象者の好み、活動手順、ライフスタイル、② 実行者の職務条件、支援技術、支援の考え方、③ 施設方針、勤務体制、ミーティング方法、環境設定、他の利用者の様子を査定し、対象者と実行者の双方がすぐに取り組める効果的な介入を決定した。介入は、アセスメント情報から要因仮説を導出し、他傷の先行条件を改善する介入を立案し、介入決定のためのアセスメントから介入のバリエーションを立案した。職員との協議により、実行できる介入を決定し、職員の実行経過から計画を改善した。その結果、機能的アセスメントから予測された他傷は減少したが、介入の不徹底や実行されない場面、新たに生じる状況の他傷は生起した。

## 3. 討議内容

行動問題の機能推定について、生起場面や機会が鍵となることや複数機能の同定など、改めて行動問題の機能推定の重要性が確認された。また、予防的介入の導出に先行条件の分析が重要であるが、その困難性が課題とされた。介入が実行される条件として、key person や支援体制が重要であり、特に、アセスメント、機能推定、介入手順や介入方略の決定のすべてのプロセスにおいて現場の職員と専門家が協働して取り組むことが文脈基準を満たすための必須の要件であることが確認された。(藤原義博)